

文学教材の研究——上田秋成『雨月物語』『菊花の約』『貧福論』の言語表現——

荻原 桂子

九州女子大学人間科学部人間発達学科人間基礎学専攻
北九州市八幡西区自由ヶ丘一・二（〒八〇七—八五八六）
（二〇一八年五月二十三日受付、二〇一八年七月六日受理）

はじめに

現代社会は「新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す知識基盤社会」¹であるといえる。また、中央教育審議会は「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて、生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ」（答申）²で、「アクティブ・ラーニング」について次のように述べている。

生涯にわたって学び続ける力、主体的に考える力を持った人材は、学生からみて受動的な教育の場では育成することができない。従来のような知識の伝達・注入を中心とした授業から、教員と学生が意思疎通を図りつつ、一緒になって切磋琢磨し、相互に刺激を与えながら知的に成長する場を創り、学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修（アクティブ・ラーニング）への転換が必要である。すなわ

ち個々の学生の認知的、倫理的、社会的能力を引き出し、それを鍛えるディスカッションやディベートといった双方向の講義、演習、実験、実習や実技等を中心とした授業への転換によって、学生の主体的な学修を促す質の高い学士課程教育を進めることが求められる。学生は主体的な学修の体験を重ねてこそ、生涯学び続ける力を修得できるのである。

国際化社会および情報化社会において、さまざまな伝達の基本になる言語を修得するには「読むこと」が大切であり、ここに文学教材の重要性がある。

本論では、上田秋成『雨月物語』『菊花の約』『貧福論』の言語表現について、アクティブ・ラーニングを取り入れた学修について考察する。

一、『雨月物語』について

『雨月物語』は、江戸時代中期の安永五年（一七七六）に野

村・梅村両書肆の合刻本として上方で出版され、野梅堂版と呼ばれている。半紙本全五巻五冊に九つの短編（「白峰」^{しらみね}「菊花の約」^{きくかのちぎり}「浅茅が宿」^{あさじ}「夢応の鯉魚」^{むおうのりぎよ}「仏法僧」^{ぶつぼうそう}「吉備津の釜」^{きびつ}「蛇性の姪」^{いん}「青頭巾」^{あおずきん}「貧福論」^{ひんぷく}）を収め、その多くが中国文学と密接な関係を持ち、和漢の古典を典拠にしている³。挿絵を描いた桂宗信は、当作品へ大いに影響を与えた都賀庭鐘^{つがていしやう}『繁野話』^{しげしやわ}の挿絵も担当している。『雨月物語』各篇に一枚ずつ、巻の四「蛇性の姪」には二枚の絵が載っている。保元の乱・平治の乱・源平の戦という時代に、崇徳院の怨霊と西行との応酬を描いた「白峰」から、豊臣政権の時代に、徳川家康の天下を予言する言葉で終わる「貧福論」まで、中世の戦乱から、その終焉に時代設定している。著者は上田秋成⁴であるが、序文にある「剪枝畸人」^{せんしきしじん}署名で刊行されたため、作者が上田秋成とわかったのは彼の死後である。安永・天明文化期の流行が浮世草子から転換しつつあった初期読本にあたる。内容は中国の白話小説の翻案によるものが多い。

鶴月洋氏は「文学鑑賞のゆたかな読者は、それぞれの作品について、それが何を典拠とし、その典拠がどのようにに翻案されているかということを読みとるとともに、その典拠をのりこえて、どのような独自の世界が創造され、構想されたかという点にまで鑑賞眼をひからし、翻案文学の妙味というものを十分味読してくれるであろうというのが、秋成の計算であり、「雨月物語」のひとつのねらいであった」⁵と指摘している。さらに、鶴月洋氏は、

『雨月物語』の言語表現について次のように指摘している。

『雨月物語』の文章は、和漢・雅俗を混淆融和させた、流麗優雅な説話体であり、吟誦にたえるものである。秋成の古典的教養が、わが国の古典をふまえ、漢籍をふまえて、故事・古語・漢語を縦横に駆使したからである。描写は幻想にとみ、つよい迫真力をもち、とくにその怪異描写は凄絶をきわめ、生彩をはなつて、読者をして戦慄と恍惚をふたつながらおぼえさせるものがある。語感を複雑にするために、漢語に和訓をほどこしているのは、のちの読本の先蹤をなす表現方法であった。

当時の古典を踏まえつつ和文調を交えた流麗な文体に、秋成自身の思想が加味されている。

秋成は、明和三年（一七六六）に処女作である『諸道聴耳世間猿』^{しよけんきこみみ}と和訳太郎の筆名で書き、明和四年（一七六七）には『世間妾形氣』^{せけんめかけかたぎ}で浮世草子の創作活動を開始していた。

『雨月物語』の序には「明和戊子晩春」^{めいわぼし}とあることから、明和五年（一七六八）晩春には『雨月物語』の執筆が終わっていたことになる。実際に『雨月物語』が刊行されたのは、その八年後の安永五年（一七七六年）であった。内容に関しては読本の形式をとり、知識層を読者に想定した思想や歴史観、作中でのさまざ

まな議論に特色がある。それまでも独学で契沖のことを学んでいた秋成は、『雨月物語』執筆の前後に、賀茂真淵かものまぶちの高弟であった国学者加藤宇万伎かとうまきに入門している。「浮浪子」⁷であった秋成は、宇万伎から思想的深化、古典学の体系的影響を受けたことから、庭鐘の作品が和漢混淆文でできた漢文調の強いものであったのに対して、『雨月物語』は原典の白話小説の調子を絶妙に翻案し、漢文調と和文調の混淆した独自の文体を創出することに成功している。

『雨月物語』という題は、秋成自身の序文では雨がやんで月がおぼろに見える夜に編纂したためと書いている。『雨月物語』の序は次のように漢文で記されている（野梅堂版原文は、白文である）。

雨月物語序

羅子撰「水滸」。而三生「啞兒」。紫媛著「源語」。而一旦墮「惡趣」者。蓋為「業所」偏耳。然而觀「其文」。各「奮」奇態。「嗔」遍「真」。低昂宛轉。令「読者」心氣洞越「也」。可「見」鑑「事實」于千古「焉」。余適有「鼓腹」之閑話「」。衝「口」吐出。雉雛龍戰。自以為「杜撰」。則摘「読之」者。固当「不」謂「信」也。豈可「求」醜唇平鼻之報「哉」。明和戊子晚春。雨霽月朦朧之夜。窗「下」編成。以昇「梓氏」。題曰「雨月物語」。云。剪枝畸人書。

書き下すと「羅子、水滸を撰して、三世啞兒を生み、紫媛、源語を著して、一旦惡趣に墮するは、蓋し業の偏る所と為るのみ。然り而して其の文を觀るに、各々奇態を奮ひ、嗔真に逼り、低昂宛轉して、読者の心氣をして洞越たらしむるなり。事實を千古に鑑せらるべし。余適鼓腹の閑話有りて、口を衝いて吐き出す。雉雛龍戦ひ、自ら以て杜撰と為す。則ち之を摘読する者、固より當に信と謂はざるべきなり。豈醜唇平鼻の報を求むべけんや。明和戊子の晚春、雨霽れ月朦朧の夜、窗下に編成し、以て梓氏に昇ふ。題して雨月物語と曰ふと伝ふ。剪枝畸人書す。」となるが、『雨月物語』にかける意気込み、創作経緯が記されている。この文中で秋成は、『水滸伝』を書いた羅貫中と『源氏物語』を書いた紫式部を例にあげ、二人が傑作を書いたばかりにひどい目にあったという説を持ち出している⁸。末尾の「剪枝畸人書」という署名に注目すると、この「剪枝畸人」の「枝」は「肢」、さらには「指」に通じ、幼いときに秋成が、右手中指、左人差し指が不具になったことを自虐した表現となっている。

井上泰至氏は、『雨月物語』の「怪異の美の本質」について次のように指摘している⁹。

『雨月物語』の文章の核心は、どこかに言葉の芸術という衣を着せ、世にあるまじき一種の「品格」を残したふるまいを以て描かれている点にある。つまり、この作品の「怪異の美」

は、王朝の和歌以来の言葉の美の伝統や、面をつけたこの世ならぬ者を演じるシテが情三分・芸七分で舞う世界を基盤にしながら、そこに近世的なりアルな人情を加えたものであるとみてよい。

秋成の言語表現の特色は「怪異の美」にある。「菊花の約」には「銀河影きえぎえに、氷輪^{ひようりん}我のみを照して淋しきに、軒守^{のりもり}る犬の吼ゆる声すみわたり、浦浪の音ぞこゝもとにたちくるやうなり。月の光も山の際^はに陰くなれば、今はとて戸を閉^たてて入らんとするにたゞ看る、おぼろなる黒影^{かげろい}の中に人ありて、風の随^{まにまに}来るをあやしと見れば赤穴宗右衛門なり。」という幽霊登場の場面があるが、凄みともいえる美しい言葉の連なりに幽玄の美が漲っている。また、石川淳は『雨月物語』の面白さは、中国の小説に典拠があるというよりも日本独特のものであると指摘している¹⁰。

秋成の「雨月」などには来世はない。「あの世」というものではない。ただ次元からいうと実在の世界とほとんど相似のようなところに別天地がある、未知の世界がある。これは仏教の「あの世」とは違います。オバケが出て来ても、あの世へ行くという途中で出て来る。これは現世と非常に関係があつて、現世からは向う側のことはわからない。まん中に闇があつて、そこに向う側からときどき首を出して来る。そうい

う世界を設定したようにでき上っております。これは実在の世界と未知の世界という二つの配置があつて、同時にその双方に関係する。つまり論語にいう「両端をたたく」。端が二つあつて、それを同時にたたかなければならない。そうしなければ世界像は完全につかめない。そういう世界観です。

さらに、石川淳は「未知の世界からの信号として秋成が見ていたので、怪異を信ずるというよりも、秋成の世界観では、実在と非実在——非実在とは実在の側からそういうので、こちら側からは見えない未知の世界でも、向うの側では存在していてこちら側を見ているという人生認識ができあがる」「と述べている。一般的には隔絶していると考えられている「向うの側」と「こちら側」は、秋成には隔てられているものではなく、自分と隣接するまさに現実の世界なのである。

青木正次氏は「彼ら（こちら側の人 筆者注）に呼び出され、彼らの自然的観念の中に登場させられるところの向う側の人間は、彼らの無意識の色眼鏡を通して見出されるために、その倫理的な、あるいは風俗的観念を正負に背負い色づけられて現れる。語り手が〈怪異〉だと語るのは、そういう彼岸の人間たちの自他の関係に悩む姿で、それを説話的な習俗観念に基づいて表現したものである。けつして妖怪や死霊の類ではない。彼ら主人公たちも相手の人間との不思議な体験を現実的にするのであつて、語り手が

そう見るような怪異の世界に迷いこんだりするのではない」¹²と指摘している。秋成の此岸と彼岸は、現代人が考える怪異とは全く違った観点から描写されていることがわかる。

文学教材としての『雨月物語』では、言語表現の特異性を見出すことが重要である。秋成の内容表現は、江戸時代の文学でありながら現代文学と地続きであるという認識が肝要である。近代作家では泉鏡花と高濱虚子が秋成の作品を愛好し、大正一三年（一九二四）には、佐藤春夫が著した、谷崎潤一郎・芥川龍之介の三人による秋成作品をめぐる鼎談「あさましや漫筆」がある。昭和二十四年（一九四九）には、三島由紀夫による「雨月物語について」があり、三島の秋成作品への傾倒ぶりがうかがわれる。昭和二八年（一九五三）には、溝口健二監督の映画「雨月物語」が上映され、原作のストーリーとは違った秋成の『雨月物語』の作品世界が映像化されている。石川淳・円地文子は秋成文学の享受をそれぞれの現代語訳¹³で表現している。現代作家では、村上春樹が自身の作品『海辺のカフカ』で秋成作品を取り上げ¹⁴、あちら側とこちら側」の世界観を秋成文学に依拠している。

二、「菊花の約」の言語表現

「菊花の約」は、全体を白話小説の『古今小説』第十六巻「范巨卿雞黍死生交」に大筋沿いながら、時代や場所を日本化している。登場人物の丈部左門が張助に、赤穴宗右衛門が范巨

卿^{けい}に対応する。時は戦国時代、舞台は播磨国加古（今の兵庫県加古川市）である。

左門は母とふたり暮らしで清貧を好む学者である。ある日友人の家に行くと、行きずりの武士が病気で伏せていて、左門は看病する。この武士は赤穴宗右衛門という武士で、佐々木氏綱のいる近江国から故郷出雲国での主、塩冶掃部介が厄子経久に討たれたことを聞いて帰るところだった。宗右衛門は快復し、左門と義兄弟の契を結んだ。宗右衛門は左門の母にも会い、数日親しく過ごした。初夏になり宗右衛門は出雲へ帰ることとなった。左門には重陽の節句、九月九日に再会することを約した。約束の九月九日となり、左門は朝から宗右衛門を迎えるため掃除や料理などの準備をし、待ち受けていた。夜も更け、左門が諦めて家に入ろうとしたとき、宗右衛門が影のようにやってきて自分が死んでいることを告白する。塩冶を討った経久が自分のいとこの赤穴丹治をつかつて監禁させたため、宗右衛門は、「人一日に千里をゆくことあたはず。魂よく一日に千里をもゆく」という言葉どおり、自死し幽霊となつてここまで辿り着いたといい、左門に別れを告げ消えていった。左門は、宗右衛門を埋葬するために出雲へと旅立ち、魏の公淑座^{こうしゅざ}の故事を例にして、丹治に信義のないのを責め斬り殺した。左門は行方をくらませたが、経久は宗右衛門と左門の信義に感服し追わせなかった。物語は「吝^{せう}薄の人と交りは結ぶべからずとなん」と、冒頭の一節「交りは軽薄の人と結ぶこと

なかれ」と同意の文をもって終わる。

青々たる春の柳、家園に種うることなかれ。交りは輕薄の
人と結ぶことなかれ。楊柳茂りやすくとも、秋の初風の吹
くに耐へめや。輕薄の人は交りやすくして亦速やかなり。楊
柳いくたび春に染むれども、輕薄の人は絶えて訪ふ日なし。
(冒頭)

尼子經久此よしを伝へ聞きて、兄弟信義の篤きをあはれみ、
左門が跡をも強ひて逐はせざるとなり。吝輕薄の人と交りは
結ぶべからずとなん。(掉尾)

「菊花の約」の言語表現には、信義という尊い人間行為の原形
がにじみ出ている。丈部親子は、宗右衛門との交わりを大切に保
ち続けていたのである。左門の宗右衛門への絶対的な信義が、「菊
花の約」を一点の疑いも挟むことのない絶対的なものとしたので
ある。

老母左門をよびて、「人の心の秋にはあらずとも、菊の色
こきはけふのみかは。帰りくる信だにあらば、空は時雨に
うつりゆくとも何をか怨むべき。入りて臥しとして、又翌
の日を待つべし」とあるに、否みがたく、母をすかして前に

臥さしめ、もしやと戸の外に出て見れば、銀河影きえぎえに、
水輪我のみを照して淋しきに、軒守る犬の吼ゆる声すみわ
たり、浦浪の音ぞこゝもとにたちくるやうなり。月の光も山
の際に陰くなれば、今はとて戸を閉て入らんとするに、たゞ
看る、おぼろなる黒影の中に人ありて、風の随来るをあや
しと見れば赤穴宗右衛門なり。

左門は、とうとうこの世のものではない宗右衛門の姿を見いだ
すのである。

踊りあがる心地して、「小弟蚤くより待ちて今にいたりぬ
る。盟ひたがはで来り給ふことのうれしさよ。いざ入らせ給
へ」といふめれど、只点頭きて物をもいはである。左門前に
すすみて、南の窓の下にむかへ座につかしめ、「兄長来りた
まふことの遅かりしに、老母も待ちわびて、翌こそと臥所に
入らせ給ふ。寤させまゐらせん」といへるを、赤穴又頭を揺
りてとゞめつも、更に物をもいはである。左門伝ふ。「既
に夜を過ぎて来し給ふに、心も倦み足も勞れ給ふべし。幸に
一杯を酌みて歇息ませ給へ」とて、酒をあたくめ、下物を列
ねてすゝむるに、赤穴袖をもて面を掩ひ、其の臭を嫌み放く
るに似たり。左門いふ。「井臼の力はた欸すに足らざれども、
己が心なり。いやしみ給ふことなかれ」。赤穴猶答へもせず、

長嘘をつきつゝ、しばししていふ。「賢弟が信ある響応をな
どいなむべきことわりやあらん。欺くに詞なければ、実をも
て告ぐるなり。必しもなあやしみ給ひそ。吾は陽世の人にあ
らず、きたなき霊のかりに形を見せつるなり」。左門大に驚
きて、「兄長何ゆゑにこのあやしきを語り出で給ふや、更に
夢ともおぼえ侍らず」。

「きたなき霊のかりに形に見せつる」には、左門への信義に身
命を賭して応えようとする宗右衛門の強靱な精神によつて現出し
た言霊の力がこもっている。

赤穴いふ。「賢弟とわかれて国にくだりしが、国人大かた経
久が勢に服きて、塩冶の恩みを顧るものなし。従弟なる赤穴
丹治富田の城にあるを訪ひしに、利害を説きて吾を経久に見
えしむ。仮に其の詞を容れて、つらつら経久がなす所を見る
に、万夫の雄人に勝れ、よく士卒を習練すといへども、智を
用ゐるに狐疑の心おほくして、腹心爪牙の家の子なし。永く
居りて益なきを思ひて、賢弟が菊花の約ある事をかたりて去
らんとすれば、経久怨める色ありて、丹治に令し、吾を大城
の外にはなたずして、遂にけふにいたらしむ。此の約ひにた
がふものならば、賢弟吾を何ものとかせんと、ひたすら思ひ
沈めども通るるに方なし。いにしへの人のいふ。人一日に千

里をゆくことあたはず、魂よく一日に千里をもゆくと。此の
ことわりを思ひ出でて、みづから刃に伏し、今夜陰風に乗り
て遙々来り。菊花の約ひに赴く。この心をあはれみ給へ」と
いひをはりて、泪わき出づるが如し。「今は永きわかれなり。
只母公によくつかへ給へ」とて、座を立つと見しが、かき消
えて見えずなりにける。

宗右衛門の「魂よく一日に千里をゆくと」という表現は、信義
に應えるために自刃した男の哀切な響きに満ちている。「菊花の
約」は宗右衛門の命がけの信義で守られたのである。

『雨月物語』の文章について、高田衛氏は「和文脈を多用し、
その修辭の新鮮と美が大きな効果をあげている。また、原話の設
定を日本の歴史風土に置きかえた結果として話の結末部は原話と
は大きく異なり、左門と赤穴の連帯が、左門の丹治に対する復讐
で証明されねばならなかったという形をとる」¹⁾と指摘している。
「菊花の約」の言語表現から、「交りは輕薄の人と結ぶことなか
れ」と「魂よく一日に千里をゆくと」について左門と宗右衛門の
信義の内実は、如何なるものかという課題を設定し、原典の資料
や翻訳を使つて、アクティブ・ラーニングの教材として取り組む
ことができると思える。

三、「貧福論」の言語表現

「貧福論」は、金銭をめぐる白熱した議論が中心になっている。

主人公の岡左内は実在の人で、東北地方の戦国武将である蒲生氏郷^{うしじょう}につかえ、金銭にまつわる逸話が伝えられ、色々な書物にその名が見える。富貴を願って儉約を尊び、暇なときには部屋に金貨を敷き詰め、楽しんだということだが、吝嗇ではなく、ある下男が小判一枚を蓄えていることを知ると十両の金をやって取り立てたという、庶民にも人気のある変人だった。

左内がある夜寝ていると、枕元に小さな翁が現れた。正体を聞くと「黄金の精霊」であるといい、世間の金銭を卑しいものとする風潮を嘆き、金の徳を重んじないのは賢明でないと説く。左内は興に乗って、なぜ富めるものの八割が貪欲で残忍なのか、仏教にいう前業のせいなのか、儒教のいう天命のせいなのかと質問をした。翁は金とは非情のものであり、金銭を貯めることは技術なのだから前業も天命も関係ないと説明する。左内はこれを聞いて、日頃の疑問が解決したことを喜び、これからの世の勢力の動きについて翁に尋ねた。翁は上杉謙信、武田信玄、織田信長のあと、豊臣秀吉が天下を取ったが、これも長くないだろうと予言し、八字の句「堯^{けう}舜^{しゆん}日^{にっ}杲^{かう}百姓^{ひやくしやう}婦家^{ふけ}」を詠んだ。夜明けが近くなり、翁の姿が見えなくなった。左内は与えられた句について考え、その意味にいたると、これを深く信じるようになった。

「貧福論」の言語表現は、形をもたない觀念の表象化が「黄金

の精霊」として可視化されて描き出されているところに特色がある。

其の夜左内が枕上に人のきたる音しけるに、目さめて見れば、燈台の下に、ちひさげなる翁の笑みをふくみて坐れり。左内枕をあげて、「こゝに来るは誰そ。我に糧^けからんとならば、力量の男どもこそ参りつらめ。あなたがやうの耄^まけたる形してねぶりを覽^{おそ}ひつるは、狐狸などのたはむるゝにや。何のおぼえたる術^{しゆ}かある。秋の夜の目さましに、そと見せよ」とて、すこしも騒ぎたる容色なし。翁いふ。かく参りたるは、魍魅^{ちみ}にあらず人にあらず、君がかしづき給ふ黄金の精霊なり。年来篤くもてなし給ふうれしきに、夜話せんとて推してまゐりたるなり。君が今日家の子を賞^めじ給ふに感^かでて、翁が思ふころばへをもかたり和^{なぐさ}まんとて、仮に化^かを見^めし侍^{さむらい}るが十にひとつも益^{やく}なき閑談^{かんたん}ながら、いはざるは腹みつれば、わざとにまうでて眠りをさまたげ侍る。

「黄金の精霊」である翁に対して、変人である左内は驚いた様子もなく、興味深く耳を傾けるところに左内という人物の本領が発揮されている。

貧福をいはず、ひたすら善を積まん人は、その身に来らず

とも、子孫はかならず幸福を得べし。『宗廟これを饗けて子孫これを保つ』とは、此のことわりの細妙なり。おのれ善をなして、おのれその報ひの来るを待つは直きころにもあらずかし。

又悪業慳貧^{けんびん}の人の富み昌^{さか}ふるのみかは、寿^{いのち}めでたくその終りをよくするは、我に異なることわりあり。霎時間^{しやくくわん}かせたまへ。我今仮に化^かをあらはして話るといへども、神にあらざる^{しんにあらず}、もと非情の物なれば人と異なる慮^{しりょう}あり。

「神にあらざる^{しんにあらず}、もと非情の物なれば、人と異なる慮あり」という翁に、左内は人間を超えたある崇高な精霊の実体を見いだすのである。

我もと神にあらざる^{しんにあらず}、只これ非情なり。非情のものとして人の善惡^{たんだ}を糾^{ただ}し、それにしたがふべきいはれなし。善を撫^なで惡を罪するは、天なり、神なり、仏なり。三つのは道なり。我がともからのおよぶべきにあらず。只かれらがつかへ傳^かく事のうやうやしきにあつまる^かとするべし。これ金に靈あれども人とこゝろの異なる所なり。

左内は、生き霊でも死霊でも、神でも仏でもない非情のものの言葉に全幅の信頼を寄せている。人間とは全く異なる非情のもの

の精霊に触れて、左内はこの世の貧福に対する理念を確立し、自己内面の覚醒を遂げる。観念や想像や幻覚などの主観的なものは異なる、客観的に存在するものとして、左内は翁の発した「貧福論」を心に納めるのである。

「貧福論」の言語表現から、「黄金の精霊」と「我もと神にあらざる^{しんにあらず}、只これ非情なり」とは、どのような存在であるかという課題を設定し、原典の資料や秋成の他の作品を資料として提供し、アクティブ・ラーニングの教材として取り組むことができる¹⁶と考える。

おわりに

古典指導で重要なことは「古典に親しませる」¹⁶工夫をすることである。文部科学省は「古典の指導については、我が国の言語文化を享受し継承・発展させるため、生涯にわたって古典に親しむ態度を育成する指導を重視する」(『中学校学習指導要領解説―国語編―』二〇〇八年七月)と述べ、二〇一五年一部改正の「伝統的な言語文化に関する事項」においても「古典の世界に触れる」「古典の世界を楽しむ」「古典を読み、その世界に親しむ」を挙げている。古典はおもしろいと生徒に興味・関心を持たせるには、原文を語彙・文法・現代語訳で読ませる学習を中心にしながらも、古典に慣れ親しむことが重要である。

古典に親しむには、古典学習に対する生徒の「主体性」「協働性」

を重視した授業が展開されることが望まれる。二〇一六年一二月の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」では「主体的・対話的で深い学び」を実現するために共有すべき授業改善の視点としてアクティブ・ラーニングを重要視している。「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業方法として、「知識構成型ジグソー法」が、東京大学大学発教育支援コンソーシアム推進機構¹⁷が開催するシンポジウムで報告されている。「知識構成型ジグソー法」とは「人がわかるということはどういうことか」という認知科学の観点に立つものである。児童・生徒の「主体的・対話的で深い学び」を実現するなかで、古典学習の目的である「古典を読解する力」「古典に関する知識」「古典への興味・関心」を育成しなければならないと考える。

「知識構成型ジグソー法」は「生徒に課題を提示し、課題解決の手がかりとなる知識を与えて、その部品を組み合わせることによって答えを作り上げるという活動を中心にした授業デザインの手法である」¹⁸と説明される。三宅ほなみ氏は、期待される学びのゴールが変わって「決まった答えを知っているかどうかで人の価値が定まった社会より、今のほうが健全でやりがいのある楽しい社会だと言えるのかも知れない」¹⁹と述べている。具体的な方法²⁰としては一つの課題に対して、(1)いくつかの問題解決のための問を提示する (2)問ごとにグループに分け、提示した問

について考えるための資料を各グループに渡す (3)エキスパート活動として各グループで資料を使って協働で考えた結果をワークシートに各自書き込む (4)エキスパート活動のグループから一人ずつ出で、新しいグループを作る (5)ジグソー活動では、エキスパート活動でのワークシートをもとにみんなで意見を出し合う (6)ジグソー活動でのワークシートをもとにクラス全体で課題に対して意見をだす (7)クラス全体でのクロストークを通して自分の考えを深める (8)最後に一人一人がリフレクション・シートに課題に対する自分の考えをまとめる。

「菊花の約」の言語表現からは「交りは軽薄の人と結ぶことなかれ」と「魂よく一日に千里をゆく」とについて左門と宗右衛門の信義の内実は、如何なるものかという課題を取り上げ、「貧福論」の言語表現からは「黄金の精霊」と「我もと神にあらず仏にあらず、只これ非情なり」とは、どのような存在であるかという課題を取り上げ、「知識構成型ジグソー法」によって協働学習を実践する。アクティブ・ラーニングを可能にするには、古典の言語表現が現代のわたしたちの言語生活とどのようなつながっているのかを、生徒一人ひとりが実感できるような文学教材を取り上げることが大切である。上田秋成『雨月物語』の言語表現には、複雑な現代社会にも当てはまる豊潤な言語表現があることから、「知識構成型ジグソー法」の古典での文学教材として最適である。「主体的・対話的で深い学びの実現」が求められていることから、国語科

教育法をはじめとして、大学での教職課程ではアクティブ・ラーニングによる国語科授業を教えられる教員の育成が最重要になってくると考える。

*上田秋成『雨月物語』の本文は、水野稔校注『新装版 雨月物語』（明治書院）、上田秋成の年譜は、高田衛・稲田篤信校注『雨月物語』（ちくま学芸文庫）、青木正次訳注『新版 雨月物語』（講談社学術文庫）を参照した。

註

- 1 中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像（答申）」二〇〇五年一月
- 2 中央教育審議会 二〇一二年八月
- 3 秋成が師事した都賀庭鐘の『英草子』^{はやくさでうし}に倣ったものである。
- 4 上田秋成（享保一九年六月二五日〜文化六年六月二七日）は、江戸時代後期の読本作者、歌人、茶人、国学者、俳人。怪異小説『雨月物語』の作者として特に知られる。
- 5 鷗月洋「解説」『改訂 雨月物語』角川ソフィア文庫、二〇〇六年七月、三四七頁。
- 6 鷗月洋 同掲書、三五三頁。
- 7 秋成の放蕩的な青年時代を自嘲的にさしていることばである。

- 8 紫式部が地獄に堕ちたというのは治承年間、平康頼によって書かれた『宝物集』や延応以降の藤原信実によって書かれたとされる『今物語』による。羅貫中の子孫三代が唾になったというのは明代、田汝成編の『西湖遊覧志余』や『続文献通考』によっている。
- 9 井上泰至「廃墟と音―怪異の美の本質」『雨月物語』の世界―上田秋成の怪異の正体』角川選書、二〇〇九年五月、一九七頁。
- 10 石川淳「秋成私論」一九五九年六月二七日、上田秋成没後一五〇年記念講演会にて。『新釈雨月物語』『新釈春雨物語』ちくま文庫所収、一九九一年六月、二二六・二二七頁。
- 11 石川淳 同掲書、二二七頁。
- 12 青木正次「解説「此岸と彼岸」」『新版 雨月物語』講談社学術文庫、二〇一七年三月、五五五頁。
- 13 石川淳『新釈雨月物語 新釈春雨物語』ちくま文庫、円地文子『現代語訳 上田秋成 雨月物語 春雨物語』河出文庫がある。
- 14 村上春樹は『海辺のカフカ』第三章で「菊花の約」を、第三〇章では「貧福論」から「我今仮に化をあらはして話るといへども、神にあらず仏にあらず、もと非情の物なれば人と異なる慮^{しとろ}あり」を引用している。
- 15 高田衛「解説」『雨月物語』ちくま学芸文庫、一九九七年

一〇月、四五九頁。

16 米田猛氏は「国語科教育では指導者が教材に惚れ込むことが学習者の学習意欲に大きく影響する」と指摘している。「生徒をとらえる古典指導のあり方」『月刊国語教育』明治図書、二〇〇六年一〇月、四〇頁。

17 略称はCOREF。大学の知を教育現場に生かすことを目的として結成された組織で、二〇一〇年から全国の教育委員会や学校とアクティブ・ラーニングの研究連携を実施している。

18 三宅なほみ「『協調学習』の考え方」三宅なほみ・東京大学COREF編『協調学習とは―対話を通して理解を深めるアクティブ・ラーニング型授業―』北大路書房、二〇一六年三月、九頁。

19 三宅なほみ 同掲書、一四頁。

20 河添房江『源氏物語』でアクティブ・ラーニングは可能か―帚木巻「雨夜の品定め」のジグソー法を中心に―を参照した。河添房江編『アクティブ・ラーニング時代の古典教育』東京学芸大学出版会、二〇一八年一月。

**A study on Japanese language art education
—A verbal expression of Ugetsu Monogatari—**

Keiko OGIHARA

Course of Principal Human Sciences, Department of Human
Development, Faculty of Humanities,

Kyushu Women's University

1-1, Jiyugaoka, Yahatanishi-ku, Kitakyusyu-shi

807-8586, Japan

No English abstract